30-1033

新入生に対する補習教育の効果について（第４報）

○石突 諭[1]，小林 弘幸[1]，高梨 香織[1]，金岩 孝夫[1]，高木 英利[1]，坂東 英雄[1]
（[1]北海道薬大）

【目的】本学では、新入生の基礎学力試験の成績不振学生あるいは高校時の履修状況より選抜された学生を対象に、補習授業（演習）を実施している。本演習は平成７年度から継続して行われ、平成 12 年度から選択科目として単位認定され、数学、物理学、化学および生物学の４科目が開講されている。16 年度は本演習に引き続き、正規授業の補完として全学生を対象とした薬学演習 I が前期後半に実施された。そこで、平成 12 年度以降の学生を調査対象として、演習対象者における演習関連科目の成績をもとにその効果について解析した。

【方法】実施要領が同じ平成 12～14 年度を 1 グループとし、これに 15 年度、16 年度を加えて 3 グループとした。基礎学力データは入学直後に実施される統一基礎学力試験成績を使用した。科目成績は評価を数値化して集計した。統計処理は、各年度内で科目ごとに成績中位者を設定して成績下位者との差を検定し、危険率５％以下を有意と判定した。

【結果および考察】成績下位者の基礎学力は、中位者と比較して有意な差が認められた。高校でおよそ半数が履修していない物理学と生物学の関連科目は、回復が速く、前期定期試験で既に学力差は解消された。化学では 15 年度、演習だけでは差は埋められなかったが、演習後に実施した薬学演習 Ｉ との相乗効果もあり、16 年度では同レベルとなった。一方、数学ではそれら効果はみられなかった。特に今年度、数学の基礎学力試験では低得点層の分布が高く、演習内容の理解不足があったものと推測された。今後この傾向は他科目においても予想され、よりきめ細かい指導体制の必要性が示唆された。